信濃

信濃札集

春

士朗居士

浅山の風日の出来て梅の花

一番咲く梅はぬるまの雪

まだ雪の残さるぬ枝と雪

旅人よ雪を踏れて雪空

梅伝ふいうまるなるや雪見

言取を先ず雪の山路

時かしてゝ学生にとゝまり来、
何事とてやらんひすゝ時ぬ是程
山里い　あらんひすゝ乃日数、
花多やさしてゝ学生を　みるゝまり
まを柳乃面やあるさの道迄
数ゝ程ゝ角も生へ　猫の恋
是やうに世くもこゝ居も猫の恋
一木乃まを面　燃る　河原の

下一

まを面に中や都乃山のふり
大佛乃面を見る彩まを辺に
あるゝ　似ぬんを　ゝ恋の姿に
迄見来て時ゝ焼野きに　北野
すうれまゆ人形をこゝ居乃
さとくと名歌乃面　孫に
松さく　一木亦なる　あるゝ山
咲みちて　ぬも　つゝ　ぬ　橋ゝ

ちうきたなくて門出る樵の郎、
向きい花盗人の古く呂この郎
花樵くと騒く独りこの寺
義七日ものも喰さぬ嵐山嵐
再嵐山嵐を樵ひて
淋しかりとりあえず花おもへ義のこの
ものあたむきひとる菴もこの事
辛くも花のえやの習りなる

こゝもりき菴やや樵を寂こと
吾朝を樵く樵の歩花嵐
義なを花乃いさよの夕月の宿
より聖西て
世を捨て歩行樵の山路に
義とりの歌みて
少く義花こゝをなよ山に

出代や鼓波の芦を片ん
谷焼の花の赤を刻み孫ん係
蛇の亭仏の花の咲日哉
ひるの北斗を打返し蛭の亦
人も石へ蛭もふへて山哉
笠寺や蛭時打の湯もしん
山吹の暮意こあて時このち
因あり任変も紙の信哉

下三

たる年を待の因螺の低徊
吾光寺
砌ふく風掃も涙出雲哉
茶碗茶や海の方より貧乏
氣目ろる目鼻も見ぬ鶏哉
名刹ろあ笑て地よ寺北より
宗盤年逢ろ打もあり臨夜
寺北取い人乃時ろ

伏見にて日くれて第り桃の花
川波や霞ゝぬる水の桃の花
柳しまや碇の行 源の石位の琴
心の井よ波知まれ名残の郭
春を惜む名残哀れ世の中
うらみすて 楳よ碇よも惜しけり
うらみまい 柳も惜し 波まれ名残

夏

山くさ皆 花うりこころもの
をゝゝ名残 白ひ猪 杜若
卯花も 垣中よ男 この家
若葉ぬくや高 時鳥ぬ 蛍よちぬ
蛍第て 山高ゝ 小夏 寒
あの坂や 川まで さとき 蛍 蛍
戸の破て 蛍 蛍の 市

子のごやまゝ西立尺いなる地蔵
百合咲くかこち良なる夕ゆふ
みゝ歩を先三百日の夢うゝ
白ゝに霧所もなき小あれ
植ゑゝ去山里を海の遥ゝ
竹植る日も人の来て眠りゝ
坂遠火や田之の隠れも時
家ゝ雲時やきめの家のと

かんこゝる時や枯木の二所
柳ゝさの水ゝ牡あり かんこゝる
ゝ吸もまゝ初宮や ほゝきた
頭ゝくゝゝ月も歩の部屋ゝ
金屏の梅ゝゝ ほゝゝ歩
部屋思ひ捨ても月歩う事
砂ゝ山ゝ 月ゝ三ゝもあれ何ゝ
ゝ遥ゝの鳥ゝ 五の夏 競ゝ山

嶋〜さに いくらもほとく梅花
ゆうをて 枝にうゆけるちまきに
鶯の 舞を清く もとにゝ 竹の一ツ
うき葉引〃 池一隅乃 動花
百日あの 伊勢ゝ清 ちまき 夕の雫
さうゝ孔ゝ やめを 屋根 拾ふる 鳥花
百日あや 彩より 蔵る あやめ草
あ京や 舟を たより る 花ほる

水 ちをを きの ちを 花ほる花
時 あい 水 鶯 尺〜 梨 ちふ ほと
保乃 ちる 日や 夕 良の 一三 月
中 の 所や 梅 ゆ る 花の 枝、
あ 所の ちを ちを 栗と 解
年 寄の 多さよ 本 多 花 ちを
鶯 あ 重 ゝ 涼〜 き 味 ち ぶ ま る、
る 志 ぬ 宿 に 来 る 夏 月 枝

剃さへ雪まゝ消ぬる北月
地北に撥ハ蟬時雨
ものうちや蛍くゝ大を焚義の気
夕たちや 仏一切の動きより、
あゝはあき吉きく西の蓮の郷
を祈る方のうるさよ 蓮の花、

秋

さゝ牧の麻ゝつまるる蓋
さゝ牧の河陰ゝ山の毎ゝ
牧ゝ人ゝ ゝ 孫と小野の夏
家を吹吉きく桐の一葉
菴のゝく拾ひ入ゝり 桐一葉
牧馬 秋ゝ 桐良ものゝ落
蓋 日ゝ小車の荷の上
天の川 乗 秋 ゝ 月 ゝ 良

せきゆる雲の四うよ天の川
佐渡の海をかすめる白雨
牧谷の池ふかく蓮の葉
松よ宵いとやうきもの夏の夜
高貴いかさ一日の日も暮ぬ
十日松蕗吟ずて稿の夢
うれしさも乾やすくまよ萩の露
虹の根や雲行きの蕗の夢

湖の水の俄さよ稲の葉
萩蕗のんと強し虫の夢

塾因みて

付神のんを尺よや稲の花
菴の扉や夏を虫のお行き
きりぎしの時やいかまて瓜の花
稲妻よ瓜作く淀の姫山
稿の影きえてあるとと法師

[illegible]の[illegible]の交る姿 田うゑ
三日月は[illegible]のよ二日月
三日月い何とまんなかの名残り
松陰のたゝや月をそなたをみる
[illegible]世や 山の上よりうつの月
[illegible]むら雲 月の雲
冷々と月は[illegible]ある[illegible]
[illegible]も[illegible]月

頃ヶ原迄 燈も月の名残り
燈乃秋い明ても望し月雪
梅女の田よ三人も月見
[illegible]人いまする頃ヶの梅
桂 恰の十年 月 桂 枝うゑ
月雪し芙蓉口にくゝの
かゝ蔵とちて久しき 勢 この事
月と日の間年 澄り富士の山

秋の雨を山の奥の増り水
寂しさの増れば里も物さびし
山雀も目や合はんと紅葉
かりしろき人のあらく音ぶるい

伊勢みて

山合も波と拾ふ金の露
小松吹伊賀を拾の夕の雨
月見草ぬ日を忘れ拾の雪

奥を鶏人の頃者よ菊の花
寂しく菊も作ぬ菴の垣
ひさ津よ分い光ら作ぬ菊の花

岐阜山をそ
そ〳〵やとて拾ふき庵を冬の松
行めい中も冬作い庵の雪
門たてる作人も作ぬ農の雪

五十嵐川

庵の涸みもすミ川ミ[illegible]
[illegible]拙同じ[illegible]取の[illegible]の[illegible]
[illegible]こくや荊や同じ焚夕[illegible]
枯て久しき松こゑ[illegible]

冬

[illegible]なきいいた[illegible]き三日の月
[illegible]涸みて[illegible]なり[illegible]の[illegible]

[illegible]くよ[illegible]細い[illegible]
[illegible]の[illegible]の戸を押[illegible]る杉[illegible]
[illegible]鴨の時ハ枯[illegible]芋[illegible]
鴨の脊よ[illegible]
[illegible]を鴨て[illegible]る[illegible]
[illegible]よ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]形よ火ハ[illegible]
老[illegible]る人や枯[illegible]の[illegible]の[illegible]

枯れやゆかしき出向の菴の犬
山の奥うら住やゆかしの一ツ家
萩の中ゆも一本あり家の垣
家やとのうち秋ふるきりあり家の垣
名ゆかしい兵面白き小家の垣
程ふるぬ分やゆ蔵家見て秋の色
無れ言あり金を降る時すう
家々を感む横のあるうこの垣

ふるはのみそれ氷る小雨の事
昨日あきはあるを家の子ふる
ふあるき一条二条や名木立
名木立 祖の ふるふ山ふる福も
きりくと芸ふむ名の月形
出る月を見る家第名の菴
月あるい人も住なり名の山
閑と九ふ家ふり名の月

絶まを冴て出るり冬の月
さゆ〳〵と降あく空や冬の夜
寒月をうつす水の底
思ひ出や今宿初雪の冷泉山
松井やあしいこをる堤もとく
さいつてもをいい降るり奥山哉
大雪の朝踏をはる山路哉
人〳〵の寒も疎るり松の雪

降雪の三年寄いつも月形山
月雪や什こちの西行ふる肩
月雪の是も昊なり枯むくら
行年のこゝろともぬ山ふかし

雑

りもそ〳〵り祭不老の山
任ひひて かゝこき仏の林哉

大空よ隈なきし鶴の齢かな

鶴鳴やかすをうろうろ和尚の庸

向ふ行和の高さよ冬吉鳥　尾張　岳輅

木枯や菜の葉よ白む鴨の足　騏六

志やるくと紫ふの竹を行を枯るゝ　魚堂

竹植て枯る木深くあるゝ　方明

三日月やかの中を一光星　五雄

雲早き月よ立ゝり枯尾花　麦阿

かくこきとりよ鳴きて柳の白しい　大阜

ゑとたよふるゝ行柳よ白反　廿汝

樽柴や赤き紀すゝまるゝ　伊勢　椿堂

牛牽よの流よ立ゝり今朝の秋　有吾

草枕戸やゆしよ月のかすみぬ　野渡
井戸や人の蓋する朝の蛙　六車
木枯の吹やて星の光り　布川
寒て孤点秋末寒の山路　ひとを
蟲板戸やゆ嶋の糸　雲き
蟲吹て寒くさる松穀堀　丘高
落電ハ南向あり花すゝ　尾張　平砂
秋風や寒くなぬ山の奥　大蘇

仲間ゝ絶ぬ風ゝ萩の花　帯梅
蕎麦ハ月ハ夕アのさいこと　野雀
寒や西や行人　梅の花　硯静
みに降や高良のかの墓賣　得芝
峯ゝ雲貧や行末の新志　由肆
旅人ゝ寒の初る　新場の市　伊勢　南泉
松風の寒空を尺よ寒の雁　推巳
寒寒ゝ桐の木持て蛙　滄波

三月や光線の山さえて　霍鳴
花ゝ出日毛年光寄日数の京　尾張　竹有
太秦や屋造出屋の　面　橘良
雪光蜂奥光さハぎ　水の上　逸人
迷ゝ芦ハ拾ゝ　今　旅の空　五道
仏植ゝ法仏ゝ　松と　沙鷗
大仏を植ゝ拾ゝや角屋　月底
白象手鞠まあ　山京の車　應汀

見不の方きゝもあゝ　枯尾花　美濃　草人
蝶ゝの　鼾ゝゝき　月ゝ　千阿
故一ゝ仏の秋風　尾張　鹿野
菜待や唯一ゝ　の　苔の面　葛井
旅人ハ何ゝ石ゝ　ゝ　黄山
高象踏ゝ歩ゝ　家　桃蹊
夏咲ゝ　風拾　の　籠の京　求巳
山平　墨ゝ　記　際も　書　梅間

白妙や猶三年すぎる雪の中　三河　秋峯

雪いよきし猶よ冬枯切株の端　卓池

草の根の穴くらくらと彼岸迄　江戸　巣兆

ちと残しき花い咲り草くさ　燕市

芭蕉忌や菴へ掩ひ炭　信　桑蛾

待星の裾よ重なる貸小袖　路川

椿もちるつきし新や芒　州　三巴

蕚の余根い早く小豆降　夫山

仰とふく鼓草は似る蔵ふ　吾仆

苟菜も芽と芽を吹奈ふ　淋山

阿房とい注子いるん茅　葉　國村

水鶏ぬもうと角ふまし世あい　陸奥　雄渕

ちる花い酒の酔るよ似るふ　文卿

涼ひっ沖の鯖先を焚　男　賀月

松風よ蒸きて仰く粽う郎　行岱

雲いらふ山の冬り麦の緑　南祖

山の井手橋の碎り友市　谷水

る借や秋ハ　地の時　妻　河月

宮城野やうき沈る秋の萩　子孝

萱ヶ地ハ枯くもゆく末ぞ　白成

麦の秋はんく生ぬ湖の遠　世竹

改先て蓼原枝なき柳の秋　旧人

唯もなき別ぬやうし猫の恋　白人

蜂のゐの蓼ヶ原の朝　京（江戸）成美

出る海めいたる秋のあきし　木海

三日月ゆおさ海のきふ京ゆ　もゝ之

夏後の蟬京の水を忘れ　画牛

駅の秋海へまふや栗拾ひ　守静

納の涼無象の月小まち　一澄

知年あてもつきらふ　文　夜　一瓢

思ふ宮をたつまぬ雁の海ゆ　一嵯

行房西足もくく雲とゆ　陸奥　湖雲

奥たちて雪の浮しく　夏の梅　物白
雲を流し流して雲雀空　浦人
咲梅ところまさりぬ　祝の白　有是
松作の高く皆迫る夢　涼堂
肥を撰ま　杖霜中　芹　菊　菓便
顧いくら　明月雨よ　栗　如陸
寒のうしろさへなくて　冬立　晋栽
二ツ三ツ咲ある　誠の　新蕎麦の　江戸　道彦

燕来て　故郷つかもとめる　護物
浮草の　なれよつくや　子の京　茅外
寒の　むりく　降　本号　浮弘　麻生
何ら用ありて　出る　梅の　菊　山流
巳ら　寒に　辞て　蕎の　花　楳の　花　一惠
時雨　寺り　芋よや　二月　晝　ノ旦
投　出て　不度　あり　無　稼　乙二
子　北　寒　先　実のり　郭公　百邪

はるゝて旅人交を松交を　栃郊
はるる　お住さるゝも　躑躅　東原
ゆゝ門の柳潺湲　与人
紀の国も　ゆふん　蓮はゝ　天民
ほくしき　完う　頭ひて　世は　拈る　蓬松
書　末あり　水あり　住は　巣の山　巣居
永菴の小さ　物の　花よりも　江戸　ら周
頭を　花の　の　鹿　乃　寥松

老子　長者　子なき　子　奥　冥々
あゝ佛　拝て　一日　伏　秋文
小男鹿の二ツ　東　冥也
胡蝶の　小　拈　江戸　素玩
牛　鳴き　子　対竹
人更　遠　山ほとゝぎす　奥　平角
房竈や　胡　山の間　北須
ゆき　の　素卿

黄の雪 冷彩をとして佛ひら　出羽　長翠

雪の低平京はあるり夜の月　素白

吟行とあはの高雲　稲九

若鮎と砂金振ふ鞭　たり　三夕

夕立や流れ出るつきき鯉　上野　鷺白

名月や能面人の　松　鹿太

独活の芽の紅くまの雪　玄々

先そやせ桑ふる桑の梅雨桑　下野　き岐

長風や吹も反も人のくく　雄尾

十柳の蝶ふそ雲の高雲　麦茂

八丈年間の在所を流の妹　お種　菖三

旅人の月代まき小まこの　雉啄

夏草や何ふを延て夏なる　洞々

夏の雪一先ん高くく高ふ桑　都々逸

古寺や牡丹間の雪の佛生香　下総　京迪

竹の根の高雲ふ胡蝶　栗堂

本かくまて 猶孫勝し蓮の花　北尼
連をあつき うつ所 陸奥の国　至長
至りも孫の 曜や むさき　常陸 鳴山
三日月いとう 紅まさる見えるこの国　翠兄
地蔵や 枯木 鷹 老こる 沢　柳丸
眼い 年の 歌 勝り 春の山　三古
花の人 柳の 陸 沼 桜　湖中
蓑笠 この 蓑 京の道 花 和 未 夾一會

夕こや 嫌 ふ つ 蝉の 三及
春 あ の 歌 を 鷹 夏 柳の 苔　乃信 太郎
大利 猪 や 鶏 も 春 蓑 と 半り　兄直
門 や 鶏 ま 勝 る 梅の 花　芦月
牧 の 孫い 長 る 小 加 茂 の 水　蒼路
湖 や こ ろ い 抜 め 草 の 家　春堂
る 買 の 来 て 春 梅 を 蓑 し り　玄雲
柏 な ぬ 春 の 梅 や 秋 の 雪　貞明

秋のゝ山てらみけるとて　　壺よりり　　嫄柯

春雨　吟草も　あらうら家　　安房　都賀

一里松　木槿　ゝ　　京　蒼虬

子ひとりよ　家内う　起て　あやめ　　千崖

一番入　ほし　掛ひめ　ゝ　の花　　茂雅

笠形い　笠　ゝ　ぬる　夕　アう　那　　雲雄

夏影や　夏　ゝ　夏　ゝ　蓑　ゝ　峡　　近江　芳之

ゆふ　て　時　と　二月の　夜の　春　　可盈

何　待　仮　も　萩の　枯　笠　　宇浮

浮　原　る　人　を　ゝ　ゝ　田　植　　爲頂

ふう　皆　芋　人　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　　春雄

木　踏　ゝ　ゝ　ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　　柏翠

ゝ　ゝ　て　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　　仙風

傘　の　京　ゝ　す　や　春　の　海　　千影

笠　の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　月　ゝ　ゝ　ゝ　　二十當

日　の　ゝ　を　一　ゝ　ゝ　ゝ　や　岡　ゝ　松　　京　芙九

西のかの秋ハ柿き付ける　六書

みよ寄る人のうれるや村雨　兵成

ひろるの宮おしろや天の川　岱李

秋の夕ま松茸て子の素　玉屑

年経い後ちろひて庫う　大坂　長春

言もやぬるものう降雨ぬくめ　長風

国の気や二尺ほをを仏花　豊江

秋の梅いろ〳〵花の尺寸る　春思

吹ちひく柳の上り柳の那　春人

夕ぐしの赤傳とけて萩の露　春哉

見もとよ所のさ〳〵やく事山る　蜂友

饅頭て張よ打せん素良の花　魯隠

若丹と赤もも老法丹の丹　京　関史

第一把あるを第て時ゆ　蕃

京行を二家ものてくるる素い　棋價

早〳〵なき日ものを因幡の素あけて　節良

菊のうゑやうやうしき家を愚あるじ　定雅

まのあたいぐ川くけふ春の月　丈九

這入より志ゝる　梅の使ひ車　月居

月雲の眼ゝ　みすゝ蝉のこゑ　竹舟（大坂）

鶯ちらしきゝるゝ　むめ　畠　浪南

若竹も海のうゝ　鶯皮　深　蛾月

湯葉やいりよりうき　蜆賣　まち九

青柳や流の流る　隅田川　丹頂

京を流年一二里ゝ　椋雅

俳諧の富士かゝれる五月雨　百堂

約束の蝉振舞や寺の山　米彦

任去ゝ行かゝるゝ菓搦（会庫）　桐栖

秋の来ゝ　縄もひゝの長ゝ　呉来

蚤蚊やにゝ泡吹き　の虫　蘭芝

胡戸出や傘のうちより遠柳　一草

散りき見ゝぬゝ　桂の雷（大坂）　夜来

燒芝や取立日ハ尺ぐる鳥の足　井眉

象の一歩踏ひて春の雪　河内　未紀

若菜より向ふ尺ぐる東山　蓬宇

名月の道紙足君かすれ　大坂　奇閑

ちるまゝに埃立せて暮の月　釣翁

八十八歩為菜の葉咲るなり　三津人

ゆ年来ぬ鶯るもあるて泥の仲　宝暦　篤老

婚しさに座を置(スヱ)ひ一信ふ　宇柏

初雪や新のかきねのうく　蔓蛇

山乃口明ゝ雪ゝ初ふ　梅佛

初春の明を引や座の松　陵炭

幕の虫啓年来雀こう郎　路宅

梅咲や人の見ぬ間の屋敷　芝雲

永禄の左勝ゝきく花ゝ　圭雨

夕アとも定ゝ花ゝの蕊まるり　元十

春光寒ゝ深や新のゝの鼻　極　玄蛙

吉野山桜の蕾とあらはれ　大坂　尺艾
雪の降り消ぬ峰に咲る是さうり　麦太
咲る梅の古き木の枝を連し　伊予　椙堂
南瓜さかりなる夢のき月桂　伯耆中　閑蔵
小夏の影見るや淋しの月　大坂　喜蔵
秋あるしやる夢の暮の志めり持　東雨
旅の日の二日夢行　城こ東　外六
順礼の二道なるなく　薄こ東　出雲　花叔

紅葉の二ほ礼なる山の陰　長門　藤庵
夢の夢かゝる降や小松山　柳仙
何吟ぬ影て花咲る春の暮　東雲
人こ住ん〳〵春なる角田川　松宇
初鳥る鶯い年寄小夏の郭　古硯
朴代て俗の臣法ふ所を弘　羅凡
噛て見ん〳〵なるぬ桜の葉　豊前　丁国
敷鶏る春や十畝のひあ礼　豊後　葵亭

たくもある眼なれ送るや長崎　筑後　文角
雲の下に紙漉なう郷の事　芦月
三日月よつけたるもしー開子多　軒兆
近い野の雲ハ暗く間の雨　雨蘭
停船やまさ空なる秋の雲　筑前　瓢風
萍をくくる屋るかまのふ　玉峰
あのよよ柳もひろり四方寺　石地
為賊うりのあるよ色塔柳ふ　肥前　翁也

鞍風
吾友
祥禾
天外
共映
立風
恋水
大峰

鞍風
あるしくと小松城まる芒の穂
近つきに成るかるしまの山
ひくくと風取りて時田堀
清炭や物意はるくしろ新
橋ちの氏繁尼や原柳の郷
柳ゝ高を居船る家のさそひ
ち居れ北て来柳の雲りの穂

草の宮根なのうしいこ屋うり　長広　青梁
る浪の流ひ出りり冬の舟　琴別
永孫ようくものの楽かきりり　阿波　葦伯
きなりと住居すかの乱の枯かつら　越後　尤琴
負行や萩よい咲き　秋の衣　年眉
小萩や天北川まて咲ちき　五芳
湯紙のちきりくりや秋の雲　路丈
人よかせて墨深くさき　史楠　桃止

松の花実のなかの泡ちあ　耳雨
川岸ゝ欠くくもくりり月　鳳阿
松子の夕陸ちきる孔雀　遠嘯
花蟹窠乃家中よ面の降ちり　奥　潤九
打くる焚火を面苔の集安　三醒
行くるなら祭　梅一時　次方
水ちとちりくさめり蟹窠　可今
笠の塔年きもてちる蓮　二松

見もしらて見まほしき義仙　立邦

五六丁月数い殘る蕨の葉　呂仲

郭公時や月数の沒たるみ　楚吟

起ふしの義よ未なりまの風　有夕

文州や男ふ孫の解けに　住九

恋しさの孫起を菴の常　一義

ふるさとの汝分とな小を春の蝶　雨沾

見れば坊の門うるはしき四月うち　梨青

行ふて忘れすのふも十日姫　三枝

文州よ情けうり三日月　露菊

芋の歯くきも今ぬ若葉小　白阿

傘を馬よ仕うり秋の風　越中　奥心

漣のうけて草い花を月　正岱

移ものの曲て吹出す嵐この野　方三

巫女とりて新もちぬや辛角力　白年

ふた見まい一ま掛て花の雲　加賀　眉山

歩行よんで歩行新年の春　鹿古

紫ハ日の入際よ夏ちこの海　梅人

山の井の水汲よ来て蛙の花　耳谷

降るき次之千姫よ竹ちとも　荒淳　儲史

行春の数像祝く小鴨ル　元々

竹取の春をうよ猫や花　星　東有

ふらくと昼もあて夏の夏　十寸影

名月や夏もそ級の浦けしき　一尤

行竹なて志ハ月そ宿のち　越後　何尺

蕨結よ木草のうも七日の夜　呉郭

紫もも春も衣ケ竹の　竹里

春よ春て春の世話の思ハる　喜年

木雑投

人は老ゆる事を深くなげかず
あるがしるべとなれる事を保れる
ものあれども其性むなしく
弱をあらはすもはかなき事
つゝ世情ふ通をなげかず
彼らをしるべとせるものは
来世の人なむ

芭蕉翁を始傳来おのおのみな老佛に帰して人
はまきめぬ限りなき風
あるべきことうたがひなし
老とは何ぞ
元をうかがへば
て世相をはなれとまる所
とのたつる詩歌を尋むて
吟詠人事ふかく研究

ずをおうくるを側ら捨れば
をなるひ好ましきを俳諧
正風なる一変ふ一変一興弘まれ
ことはを変ぜざる所なる原の
さ捨又尤永こころして果くば
蕉翁をうたひなる尤を所
とも拡蕉くしていたれなる
疑論又迷元のことくさいるは
ことをうしなんかをなき

をあ〻ぐ、京弘まのも法を
京極弘いしかすなるあるの
なをさとるをさとる清くとも
引せる拙をるこ技をまさしく
古をの尽意なるをさて
そ弘を毫を到る文物猶ら
光の世よつなるれやをく墨を
のこおもてをを布めて、いくき
やつをる世ふるをみるもい

ふせ〻ををみち素なる〻ち
附百弘保そ芭を〻をを文
とを弘世一とそ正風弘を法
こ詩を毫中ち拙京豊弘
尽法弘をうを京しのる文
さを文〻の拙やさを〻れと
あ多を原とうを法とを仕立
る原を小芭まもち幾月すも
な義法か義川の水くさ幾

うつくしなを死ぬ法玉ぎつくいな
ら兒神をも盛をきめるむいと
おゆつのなり　古人也朗居士
三段ものを引きんと思
て　新説をもとめられるやうて
他人に　毎下に延寶元和比
俳諧をとりまきして　古雅比
本をもとめ　去ぬして其
あるりの古学の句をさへ手

ふふる人稀なりさ保て比不
学怪者まてを世代翁比俳
諧を好む平安時代比のときの
なりと云てされれたてをとの度
比生比此来邪まを及ふまて世保
説ならを　なのりおの友人
聚者をもらりか比居士比活
主をとりるも比ものあなか地に
そ比生活をうつして比

集まりあつまりて
ゑ〳〵狂風流を捨あつむ元や
見もつかぬ狂文の業ち〳〵
をてつる百ゑむ花狂目を戯
さて狂者の多業もまさ〳〵夜ふる
夜半伐丞ふもの〳〵ゑさ〳〵ゆ
ゑ〳〵さ〳〵ゑまるゑあ〳〵ぬそ
の

文化九年孟八
雪坡 芙人淺

雲多山史

靜軒述

蕉門書肆

京寺丁二条

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛